
魔操士は平凡を愛す

NINO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔操士は平凡を愛す

【Nコード】

N4128Z

【作者名】

NINO

【あらすじ】

『地味に地道に平凡に（いつも通り）』

代々伝わる家訓を銘に、今日も「いつも通り」を心がけて、守りの森の魔女の家で平和な毎日を送るユラは、魔女ではなくて、ただのおばちゃん薬師・・・であり続けようとしたのだけど？

どうして赤の他人（王家だけど）のお家騒動に巻き込まれているの??

コツコツ積み重ねてこそ保たれる平和な毎日が崩れるのは、ほんといかに些細な、でも面倒くささ・胡散臭さ全開な出来事が原因なのよ

ね。

せっかくフラグ回避してきたのに〜っ！

しょうがないから出来るだけのことではしましょか。平穏な毎日を取り戻すために！

プロローグ

それは12年も昔。

わたしにとってはごくごく普通の日常だった。

朝起きて、顔を洗ったらスキンケア。

朝食はクロックムツシュにサラダ、フルーツにヨーグルト、しっかり食べて、食後はコーヒーを飲みながら経済新聞に目を通す。

時計を確認して、食器はキッチンの食洗機にセット。ベランダに出て鉢植えに水やり。

パウダールームに向かって歯磨きしたら、フルメイク。今時あえて黒いロングヘアーはしっかりブラッシング、三十路近くてもキューティクルは失わないのは毎日の努力の賜物よ。

寝室に戻ってクローゼットから取り出すのは、戦闘服と豪語するシルバーグレイのスーツに清楚かつエレガントなフリルブラウス（もちろんシフォンよ！）。

着替えて姿見で全身チェック。ストッキングにも伝染無し。

今日も完璧、キャリアビューティースタイル。

いつ急な会議が入ろうとも、どんな難しい商談が始まるうとも、突然の取材のアポが入っても。

ええ、ええ、しっかりこなしますとも！

自分の城を買ったからにはがつつり稼ぎますとも！

最後にバッグの中身をチェック、忘れ物が無いのを確認したら、これも戦闘服の一部、7センチヒールを履いて、玄関を出る。

おひとりさまのお城を出ながら一言。

「さあ、今日もしっかり働いて稼ぎますよー」

頭のどこかでは、お祖父ちゃん、お祖母ちゃん、お母さんが困った顔しているのとあわせて、子供の頃から聞き慣れた言葉がテロップのように流れているけれど、それにはごめんなさいをして、玄関の扉に鍵をかける。

ガチャリ、その音と一緒に気持ちを切り替えて。

わたしは今日も、ガッツリ派手に稼ぎます！

・・・なーんて、ほんと毎日毎朝、自分を鼓舞してわたしなりに頑張ってたんだけどねえ・・・。

それが何でかまあ、いろいろありまして。

ええ、ほんといろいろあります。

ちょっとマジでシャレになんないでしょ、なんなの一体この状況

！？ みたいなの？

異世界ってなあに？ なんのお約束？ 何フラグ？ っていうか三十路近いのにアイタタタ！？

って状況になりました。ええ、はい。

まあ、それに至った経緯だとかシャレになんない状況はおいおいの話として。

ほんっとーに愕然としたのよ。

聞くこと、見るもの、すべてに培ってきた一般常識とともに自分のアイデンティティを破壊されていくような気すらしたわね。うん、で、そうして自分が置かれた状況（まあ、シンプルに異世界突入しちゃいました！ だけどさ、ふん！）を理解するに比例して、バカみたいに泣いたし喚きそうになったしゴネたし怒ったりもしたのよね。

それでもまあ、最終的には今すぐ元の世界に帰りたかっていう、自分の当然の希望が叶うことは無理だとなんとか納得しまして。それを腹立たしくも思ったけど、わたしも三十路に近い大人ですから。

今思えば結構無理しちゃってたんだなあ、と思うけど、デキル大人の女を何年もやっていただけだし。

まあ、そんなこんなで譲歩して、救済策が必ず出ることが前提の現状維持を条件として、そのイロイロな状況を受け止めることにな

っただけだね。

でもって始めてみれば、その状況（言いたくないけど異世界生活よ！）が案外自分には向いていると気付いたりもしたわけよ。

そこで、今さらながら「お祖父ちゃん、お祖母ちゃん、お母さん、ごめんなさい。でもって家訓を口酸っぱくして言い続けてくれてありがとう」なんて感謝して、毎日平穩に過ごしてたんだけどねえ・・。

でもって、ながーいながーい現状維持の為に、毎朝呪文のように家訓を口にして努力も惜しまなかった（つもり）んだけどねえ・・。

それがどうしてこうなったのやら。

目の前を流れるのどかな田園風景をなんとなくに見ながら、この世界にきてほんと久々に。

随分「吐かなくなった」溜息をわたしつてば漏らしちゃったりしてるわけよ。

「セーメ様、どうなっちゃってんのよ」

というぼやきと共に・・。

いつも通りの日常と過去と #01

朝、目覚めてするのは大きな伸び。

ベッドを降りて、カーテンをそつとめくり、外の天気を確認する。窓ガラスに映った自分の顔を見るのは一瞬。

慣れ親しんだ呪文を小さく唱えた後は、顔を洗って身支度をして。

寝室を出る前に姿見に映った自分が「いつも通り平凡」であることを確認して口の端を上げる。

そして、いつも通りに籠を手に、小さな家の台所の裏戸から庭に出る。

まずは雲ひとつない朝の澄んだ空を見上げて深呼吸。

まだ薄暗い朝の空気は、初夏とは言え若干の冷たさを感じる。

大きく吸った息を吐き出しながら、口の中で小さく呟くのは彼女だけの大事な言葉。

それは魔法の呪文でも何でもない、ただの言葉。

きっと他人が聞いても首を傾げて、ただど大した意味を捉えることもなくスルーして終わるような、ただの単語の羅列。

いつも通りの同じ言葉。

「地味に地道であれ。いつも通りの平凡であれ。さすれば幸せは逃

げないもの」

そう言つて、目の前の庭に視線を落とす。

今日もまた、いつも通りの平凡な朝を迎えられたようだ。

ただそれだけのことにユラは満足げに口の端を上げた。

「セーメ様たちにも感謝しないとね」

そう付け加えて。

大いなる存在セーメ、光の女神ルーチ、闇の神ダウスタラニス。

世界は何もない混沌の『魔素』だけの大海原だけだった。

そこに原初の島と言われる大地とともに出現したのはセーメ。

その中心でセーメが右の腕かいなを振り上げると現れたのが光の女神ルーチ、左の腕かいなを振り上げると現れたのが闇の神ダウスタラニス。

セーメの両脇に現れた兄妹神の二柱は、セーメが何を言うでもなく、世界を形あるものにするために、それぞれ天に昇り光と闇の空間、つまりは時ときを創った。

それが確かなものになると、セーメは今度は幾度かの息吹でこの世界にたくさんの物を生みだした。

一息目からは、ありとあらゆる『植物の種』が生まれ、原初の島は緑溢れる大自然の島となった。

二息目からは、ありとあらゆる『生物の種』が生まれ、原初の島に命を持つ動物と人が現れた。

セーメは、そんな限りある命しか持たない生物たちに、それぞれに見合った力と知恵、そして「言葉」を授けた。

セーメの恩恵を授かった生き物たちは、限りある命を未来へ繋げるためにそれぞれが番つかいとなり、あつという間に次の命を増やし続けた。それは人と人、動物と動物だけではなく、人と動物が交り合っあって生まれた生き物も在り、気付けば、原初の島は溢れかえるほどの多種多様な生き物ばかりとなってしまった。

そうなると自分の生きる場所を守るため、自分という命の種を存続させるため、力と知恵と言葉を持った生き物たちは衝突するようになった。

ただの小さな言い合いのような衝突であれば、それは言葉を持つ生き物同士、解決も出来たが、時を経るとともに能力の違う生き物の間ではだんだんと力の優劣が生まれ、話し合いや協力といった解決方法が後回しにされるようになってしまった。

動物の圧倒的な破壊力、人の狡猾さと結束力と適応力、人と動物の間に生まれた者のみが操る魔素の力……これは後に魔法と呼ばれるようになる……、それぞれが特有の力をもって互いの命を削り合うようになってしまった。

それを見て嘆き悲しんだセーメは、兄妹神のダウスタラニスとル
ーチと相談し、己の息吹から生まれた限りある小さな命たちの行く
末を守るために、三度目の息吹を世界に与えることにした。

原初の島を世界の中心から等間隔に離れた場所に向かつてセーメ
は大きな息吹をぐるりと回りながら均等に吐き出した。

何もなかった大海原に新たに出現したのは、五つの大地と、その
核となる守護神たち。

それがセーメの御子神五柱。^{みこがみつはしむ}

木の神アール、火の女神ジャーマ、土の女神ティエラ、風の神
ヴェント、水の神ヒュドールである。

またこの時、魔素ばかりの大海原が大きな変化を遂げ、海を守る
者イルメアが、限りある命の糧となる生物 - - 魚や貝、海藻の類
とされる - - と共に現れた。

生まれたばかりの御子神たちと海を守る者イルメアは、己の神力
でもってそれぞれの大地と海を守り、原初の島から渡ってきたそれ
ぞれの限りある命を統べることをセーメたちに誓った。

セーメは御子神たちに限りある命を預けることを決め、そして強
大過ぎる力 - - 知恵と言葉と魔素を操る力 - - を、限りある命
からそれぞれ取り上げた。

力を取り上げられたことにより、己たちの無力さを思い知った限
りある命たちは、セーメの怒りと悲しみを知り、それまでの自らの
愚行を心から悔恨し、それぞれ新たに在ることを許された地で、改
めて神々を畏れ敬いながら暮らすようになった。

それがこの世界と信仰のはじまりである。

セーメは世界の創造神、光の女神ルーチ、闇の神ダウスタラニス
は時を司る兄妹神二柱、大陸の守護神として限りある命に恩恵を与
える役目を司ることになった御子神五柱 - - - 木の神アール、火
の女神ジャーマ、土の女神ティエラ、風の神ヴェント、水の神ヒュ
ドール - - - 。

限りある命の糧となる海の恵みを育み、旅人の航路を守る役目を
司る海の守護者イルメア。

世界はセーメと光と闇の神を祀る聖地と、御子神五柱が守護する
五つの大陸と海の守護者が治める大海原で成り立っている。

これは、ユラが知る世界とは違う世界の成り立ちの話。

12年も前にこの世界に落ちてしまったユラが、魔女に聞かされ
たこの世界の常識である。

いつも通りの日常と過去と #01 (後書き)

かなり久々の書き物にて、少々見切り発車な感も否めません。
自分の趣味ががつり表されているだけなので、楽しくない方には
ごめんなさいorz。

しばらくはのんびりペースですがご容赦くださいませ。

いつも通りの日常と過去と #02

バジルにミント、タイムにローズマリー、アンゼリカ、オレガノ、クレソン、ルバーブ、ラディッシュ・・・。

小さいながらも自慢の庭を色とりどりの花や緑が茂っているのを見るだけで幸せな気持ちになっていく。

数十種類のそれらが生い茂る庭は、今となつては想像も出来ないほど何もなかった・・・12年前のここは茶色い土くれと小石だらけで雑草がところどころ顔を出していただけ・・・時から、ユラが時間と労力をかけて整えてきたものだ。

街で購入した種や、森で分けてもらった小さな苗を一つひとつ植えて育て、増やし・・・そうやって丹精込めて育ててきたものだ。

育てたそれらは、ユラの食卓を彩るほか、消臭剤や香草茶といった日用品、薬の材料と、薬師となった彼女が得る大事な収入源でもある。

採れ頃のハーブの軟らかな葉をせっせと摘んでは左腕に抱えた籠に入れ、時折土の状態を確かめ、「美味しく育ってちょうだいよ」とハーブたちに声をかけては視界に入った雑草を抜く。そんな作業を繰り返し、庭のあちこちを移動する。

籠がある程度ハーブと花、小さな野菜でいっぱいになれば、それを大事そうに抱えて家の中に戻り、台所にある大きなテーブルに置

いてまた庭に戻り、今度は水をまく。

大量の水を必要とするハーブや野菜が植えられた土には特に念入りに。

どうしても栄養が足りなさそうな土には腐葉土やお手製の植物栄養剤を使うが、朝の収穫に精を出しながら確認した土の様子は悪くない。土の女神ティエラの加護サマサマだ。

そもそもハーブは強い植物でもある。おまけに常日頃から世話をしているだけあってユラの庭は、森の奥に負けないほど肥えた土地だ。あとは陽の光がしっかりとサポートしてくれる。

しっかりと水分を得た緑たちを満足げに見やって、ユラは太陽が昇り始めた空を眩しそうに見上げた。

「お日様ありがとう、セーメ様もルーチ様もダウスタラニス様もティエラ様もありがとう、今日もよろしくね〜」

自然の力とこの世界の神々が与えてくれる加護にいつも通りの言葉で感謝しながら庭を後にし、裏戸から台所へ戻れば、今度は収穫した物の仕分けと朝食の準備だ。

ハーブと花と野菜は、料理に使う物だけを残して乾燥させる物と薬作りに使う物とに分けてそれぞれ木箱にしまう。

それらから少しだけ分けておいた黄色い花を咲かせたタンジーは細い花瓶に活ける。

赤茶けた花瓶は素朴な物で、お世辞にも見目が良いとは言えない作りだが、ユラの家に野菜を持ってきてくれる村の子供が学校の授業で作ってくれた物だ。

それをテーブルに飾れば、今度は朝食作りに精を出す。

竈に火を付け、昨日の夜に作っておいた野菜たっぷりスープが入った鍋をコンロに置き、大甕から汲んだ水を張った陶器のポウルにハーブをつけておく。野菜を切りながら考えるのは、オムレツの具材だ。少し前に街で購入したベーコンの残りにしようか、それともブレーンにしようか……。

そうこうしていると、玄関からカランコロンとやわらかなベルの音が鳴り響いた。

「あら、もうそんな時間なのね」

まな板から顔を上げると同時に聞こえたのは、いつも通りの元気な声。

「おばちゃん、おはよー！」

振り返れば、これまでと同じ。

昨日と同じく、元気いっぱいといった少年が玄関から飛び込んでくる。「いつも通り」な日常。

朝の光とともに訪れた子供を見て、ユラは目を細めながら「いつも通り」に心から感謝した。

それは12年前に遡る。

ユラは、地球という星の日本という国で、仕事に励むごくごく一般的な会社員として毎日を過ごしていた。ごくごく一般的と言うには、彼女の生活も彼女自身も少々派手ではあったが・・・とにかく、彼女自身は、自分の生活に何の不自由も不満もない生活を送っていると信じていたのである。

それがある日の休日、実家の神社の蔵掃除を手伝わされることになり、そこで見つけたのがボロボロの古いお札である。

みやぐ宮司でもある祖父に報告するも、祖父は見たこともないと言い、ごんぐんじ権宮司でもある祖母もごんねき権禰宜である両親も知らないと言う。

本当かどうかは知らないが、神力があると噂の祖母が「触っても何も無いから焼いてしまつて構わない」と呆気なく言うものだから、蔵から出した他のごみと一緒に燃やした・・・念のため被つてはもらつた・・・ら、何故か奇妙な色の煙が発生し、ユラが「あれ？」と思うよりも先にそれらが爆発したのだ。

いや、爆散と言つた方が正しかったのか。

ともかく爆風で蔵の壁に叩きつけられたユラを見て、悲鳴を挙げた母が呼んだ救急車で病院に運ばれたところまでは記憶は定かである。

医師や看護師に受け答えしたこともぼんやりだが覚えており、病院のベッドに寝かされ点滴を打たれたそこまでの記憶もすっかりし

ている。

救急車に同乗した母も、実家から駆けつけてきた祖父母に父親も
- - -みんな神職装束のままだったのはある意味笑えた - - -ベツ
ドの傍にいて、みんなが「無事でよかった」「軽傷で済んでよかつた」と泣いて喜んでいたから、ああ爆散は凄かったけど、やつぱり大した怪我でないのだろう、さすがに注射何本も打たれて眠いや、目覚めたら打撲痛が嫌だなあ、自分の担当の仕事の締め切り大丈夫だっけ? . . .くらいにしか思っていなかった。

ところが、次に目を覚ましたら、そこは病院ではなかったのである。

何も無い真っ白なのか真っ黒なのかも判断がつかない不思議な空間に、きらきら光っている(ように思えた)人たちに囲まれていたのだ。それがファンタジーそのものな格好をした綺麗(と思われる)な女性とも男性ともとれる顔立ちの人たちなのだ。

なんだなんだ夢か? いつの間にこんなファンタジーな夢を見るようになったんだわたし、最近この手の映画観たっけ? って言うか夢の中で混乱するなんてヤバいでしょ自分、と自分で自分にツッコミを入れるも言葉が出ない。

そうこうしていると、その中の一人が「申し訳ございません」と土下座したのである。土下座!

ジャパニーズ正式謝罪最大級のポーズだ。

「へ？」と間拔けた声が、自分の夢（だと思っていた）の世界での第一声でもそれは仕方なからう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4128z/>

魔操士は平凡を愛す

2011年12月15日00時50分発行